

## [報告] 第 29 回歴史地震研究会参加記

東北大学災害科学国際研究所 人間社会対応研究部門 \* 蝦名裕一

Impression Report of 29<sup>th</sup> General Meeting of the Society of Historical Earthquake Studies

Yuichi EBINA

Human and Social Response Research Division

IRIDeS (International Research Institute of Disaster Science), Tohoku University

27-1 Kawauchi, Aoba-ku, Sendai-shi, 980-8576 Japan

### § 1. はじめに

2012 年 9 月 14 日(金)から 16 日(日)の 3 日間、神奈川県横浜市において第 29 回歴史地震研究会横浜大会が開催された。14 日、15 日は横浜市開港資料館講堂における研究発表会、16 日午前は横浜市内の見学会、午後は横浜市開港記念会館における公開講演会の日程で開催された。

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災以降、被災地における歴史資料レスキュー活動に従事するとともに、東北地方の歴史津波地震についての研究に本格的に着手した筆者にとっては、初めての大会参加となった。甚だ僥倖ではあるが、本稿では初参加の筆者の目からみた、3 日間の歴史地震研究会横浜大会を紹介をしたい。

### § 2. 研究発表

1 日目は「津波堆積物」、「ポスター発表」、「関東の地震」というテーマごとに、16 本の発表がおこなわれた。津波堆積物の研究発表では、奥尻島、三浦半島、静岡県磐田市、石垣島の地層調査や、2011 年の東日本大震災で被害を受けた千葉県浦安市における現代の埋立層に着目した発表がおこなわれた。また、午後には 7 件のポスター発表がおこなわれ、三浦半島の津波堆積物からみた関東地震や地殻変動、静岡県における浜名湖の津波堆積物の研究とアンケート調査による液状化発生地点の解明、安政南海地震の地殻変動、秋田仙北地震関係資料、東日本大震災における青森県八戸市の被災状況調査が発表された。関東の地震については、常陸国鹿島社の元禄関東地震の記述、喜界島周辺の諸地震の震源の再検討、2004、2005 年の房総沖地震津波や 2011 年東日本大震災をうけ歴史地震の震源域の再検討などが発表された。また、1923 年の関東大震災に関して集中的な研究発表があり、石碑や小学校の記録、

犠牲者への慰霊・追悼、京都帝国大学の活動や煉瓦建造物の被害状況についての研究発表がおこなわれた。

2 日目は「越後・近江・丹後・豊後の地震」、「南海トラフの地震」、「北海道・東北の地震」というテーマで、14 本の研究発表がおこなわれた。越後・近江・丹後・豊後の地震については、古代に描かれたと伝えられる絵図から類推される越後地方の地形変遷、976 年地震の平安京周囲への被害状況、1596 年豊後地震の被害状況の再検証、1927 年北丹後地震については熊野郡の被害状況と、峰山町・網野町の復興計画、震災記念館の建設の意義についての研究発表がおこなわれた。南海トラフの地震については、フィリピン海プレートにおけるスラブ内地震の評価、過去 4 回の東海・東南海地震における津波累積エネルギーの分布、1498 年明応地震津波に関する現地調査、『谷陵記』からみる 1707 年宝永地震津波における高知県の津波浸水状況についての研究が報告された。北海道・東北の地震については、1454 年に東北地方で発生したとされる享徳地震の史



研究発表会の様子(9 月 15 日)

\* 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 27-1  
電子メール: ebin@irides.tohoku.ac.jp

料分析，岩手県宮古市周辺の史料から再現した1611年地震津波のメカニズム，1780年ウルップ島沖地震に関する諸史料，八戸地方における寛文年間以降の歴史災害についての報告がなされた。

### §3.見学会

9月16日午前には見学会「横浜・関東大震災の痕跡をめぐる」がおこなわれ，横浜市の山手，元町，山下地域を，ボランティアガイドの方が語る関東大震災とその津波被害の解説を聞きながら，市街地に残る大震災の痕跡を見学した。横浜外国人墓地や山手十番館のエキゾチックな町並みを歩きながら，元町公園内の山手80番館遺跡では，赤レンガ造りの西洋建築に刻まれた関東大震災による被害状況などを見学した。今日では観光スポットとしても有名な山下公園は，関東大震災の復興事業として震災瓦礫を利用して埋め立てられたことを聞き，大きな衝撃を受けた。今日の国際都市・横浜の繁栄には，関東大震災や戦災を経て，そこからの復興を成し遂げた人々の営みが，確かな礎となっているのである。東日本大震災の被災地で，歴史資料レスキューをしながら目の当たりにした被災地の惨状が忘れられない筆者にとって，横浜市先の先例を学ぶことにより，東北地方の復興への希望を見いだせるように思われた。

### §4.公開講演会

9月16日の午後からは，公開講演会「神奈川県関東大震災」が開催された。東日本大震災以降，新たな大規模災害発生が懸念される昨今，大震災以降の歴史津波への関心の高まりを示すように，会場は例年になく来場者であったと聞いた。武村雅之氏「関東大震災と神奈川」では，関東大震災の被害を伝える石碑や碑文から，横浜市街地の火災，小田原における津波の被害について述べられた。大西比呂志氏「女学生のみた関東大震災」では，当時のフェリス女学院の女生徒達による震災文集から，関東大震災発生時の状況を詳細に述べられた。寺崎弘泰氏「浦賀町の震災対応」では，震災発生直後からの当時の警察や町役場などの行政の対応や，青年団や消防団といった住民の震災対応への参加が述べられた。松浦律子氏「神奈川県の津波想定について」では，近年作成された神奈川県の津波浸水予想図から，予想される津波被害とその対策について述べられた。

質疑応答では，特に一般参加者からの，来るべき関東大震災型地震についての質問が集中し，講演者達から発災時に予想される状況や心構えについて述べられた。講演会の最後に，司会の北原系子氏は，日本のように災害に関する大量かつ多種多様な歴史資料が残存している地域は，世界的にも希有な例であることを述べられ，また東日本大震災の関連資料保全の必要性を提唱された。

### §5.おわりに

筆者にとっては歴史地震研究会への初めての参加となった横浜大会であるが，全体を通しての印象として，地質学研究や数値解析による地震メカニズムの分析など，理系分野からのアプローチだけではなく，歴史地震の史料に対する歴史学的分析や，震災後の社会動向を分析した文系分野からの研究も活発におこなわれていた。それは，東日本大震災をうけて，将来の大規模災害に備えて，過去の歴史災害に対する研究の需要が高まっていること，またその研究には文系・理系の研究分野が連携した取り組みが必須であることを示しているといえよう。筆者自身，2012年4月より文理連携の災害研究を掲げて発足した東北大学災害科学国際研究所に身を置いており，今回の研究会で得られた知見のひとつひとつを，自らの研究活動に取り込んでいきたいと考えている。

盛会に終わった第29回歴史地震研究会横浜大会の中で，筆者の胸の中には，あるひとつの思いが去来していた。こうした大規模災害に対する関心の高まりが，あの東日本大震災の発生以前にあったならという思い，また筆者自身もそうした関心と意識をもち，こうした研究会にもっと早くから参加していたなら，という忸怩たる思いである。横浜大会会場で感じた，災害について研究者のみならず一般参加者をも巻き込んで展開する議論と熱気に，将来に向けて様々な可能性を模索しようという状況こそが何よりも貴重なことだということが痛感された。

このような大規模災害をめぐる様々な気運の高まりを一過性のものに終わらせてはいけぬ。私達一人ひとりが災害に備える意識を持ち，それぞれが災害について考えること，それこそが将来の大規模災害に備える防災活動なのだ。そうした意味でも，新たに災害研究を担う一人となった筆者自身，将来の防災対策の一端を担っているという責務を認識しながら，日々研鑽していくことを，ここに誓いたい。



第29回歴史地震研究会（横浜大会）懇親会場にて



公開講演会場となった横浜市開港記念会館



質疑応答の様子